北越雪譜 初編 地

ル 4
328
2

呂
門
號 328
巻 2

北越雪譜初編巻之中

目録

雪類人ホ災ヒ・次第下ホつづく
玉山翁が雪の圖
縮の種類
緯綸
織婦の發狂
御機屋の雪威
わらふら
菱山の奇事
狐火
雁の代見立
寺の雪類
越後縮
縮の紵並紵績
織婦
御機屋
縮を爾も並縮の市
雪中花水花ひ
秋山の古風
狐を捕る
天の網

文華堂藏

雁の總立　　浩海川ざの渉り

通計　二十四條

北越雪譜初編卷之中

越後塩澤　鈴木牧之　編撰

江戸　京山人百樹　刪定

○雪頽人ハ災も

吾住魚沼郡の内ゆ雪頽の為ハ非命の死をするる事甚村の人のそそをたるハ記も多くとも人の不祥なるハ人名を詳ハせバ○てハ何村とのハ形ハ家内の上下十人あまりの農人あり主人ハ五十歳ばかり妻ハ四十ハかりバ世息ハ二十あまり娘ハ十八と十五こいづれも孝子の聞ありけり一年二月のそどゆ主人ハ朝より用ある所へ出行しが其日も已ハ申の頃ゆまで帰りきたらバさのゝ間をとるべき用ゆもあらぎりけるバ家内不審ハ思ひ件家僕をつかて其家ハいづり父が事をたづね〳〵ハきたらバとゝ人ゆ家僕と共ゆ尋求しゝ更ハ音問をきらぬ日もすゑ暮ゆんとするバ空しく家ハ帰

りしなくのよし母に語りければ、さては心得ぬ事とて心あたりの処かしこへ人を走らせて尋させけるに、その在家さらにしらざれば、其夜四更の頃にいたれども主人は皈らず。此事近隣に聞えて人々集り種々に評議して居るをりしも、一老夫来りていふやう、あるじのかへらぬとや、我心あたりのあるゆゑしらせ申さんとて来りしといふ。主人の妻大によろこび子どもらもともどもに言語をそろへてまづ礼をのべ、その仔細をよく語りければ、老夫いふやう、それがし今朝西山の嶺半にさしかゝらんとせし時、こゝのあるじに行逢、何方へといひければ稲倉村へ行とて行過ぬるに、我は宿へ皈り足ゆて遥に行過る頃、例の雪頽の音をきゝて、こゝろかゝりし山なれど嶺を無事に通りしをよろこびしにつけ、こゝのあるじはいかにとを无難に行過ぬらんや、万一なだれに逢はしなんかぎりしらと案じつゝ宿へかへりぬ。今に皈りもやらぬはもしやなだれにうたれたるにやといひて眉を皺めければ、親子は心あたりときゝてたのもしげもなく案じひて顔見あはせ泪さしぐむばかりなり。老夫はなだれをよくしるひとくに

立かゝりぬ。集居る若人どもこれをきゝて、さらばなだれの処にいたりてたづねん、炬たいまつよなど立騒ぎければ、ひとりの老人がいふやう、まづまちたまへ、遠くたづねに行し者もいまだかへらず、今にもその人々とおなじくあるじの皈りたまはんもしりがたし。雪頽にうたれしなどいふやうなる不覚人にはあらざるを、かの老奴がいひつることをいひて親子たちの心を苦しむるといふに、親子はこれに励されて心慰酒肴をいだして人々にもてなす。これを見て皆打寄つゝ炉辺に座列て酒酌かはしつゝ時うつりて、遠く走る者どもも立かへりしに行方は猶しれざりけり○かくて夜も明ければ村の者どもはきゝつけて聞しほどの人々此家に群り来り、此上はとて手ごとに木鋤を持、家内の人々も後にしたがひ、かの老夫がいひつるなだれの処に至りけるにさて雪頽を見るに、きのふはあらぬものなりしのなだれなれば道を塞ぐこと二十間余り、雪の土手をなせり。よしやこゝに死たりともなだれの下をさぐらんとよろぼふもなければ、いかゞせんと人々佇立るなかに、かの老人よしく形為こそあれとて若

き者どもをつれ近き村にいたりて雞をかりあつめ雪頽の上にはなち餌をあたへつゝかゝる処へおもはせけるに一羽の雞羽ばたきして時ならぬに為晨けれバ餘の雞ハとりもちてにあつまりて声をあはせけりこれハ水中の死骸をもとむる術なるを雪に用ひしハ應變の才なりとのちく〳〵までも人々いひあへり老人衆にむかひおそらくハ此下に在るべしいざ掘れかしとて大勢一度に立かゝりて雪頽を砕きなどして掘けるほどに大なる穴をなして六七尺もほり入れしが目に見ゆるものさらになし猶ちからを尽して掘けるに真白なる雪のなかに血を染たる雪にほりあてたりやとて猶掘り入れしに片腕ちぎれて首なき死骸をほりいだしぬさて腕ハいでしかども首ハいでずこハいかにとて廣く穴にあけるなかをあちこちほりもとめても首もいでず雪中にありしあま面生るがごとくさきのぜんよりこゝにありつる妻子らこれを見るより妻ハ夫が首を抱へ子どもハ死骸にとりすがり声をあげて哭けり人々もそのあはれさを見て袖をぬらさぬハなかりけりかくてもあるまじければ妻ハ着たる羽織に夫の首をつゝみて

かくて世息ハ布子を脱て父の死骸の腕をそへて泪ながらにつゝみ資負んとする時さいぜん走りゆきたる者ども戸板むしろなど擔げる用意をなしきたり妻がもちたる首をもあはせこれにのせてかつげさせ人々前後につきそひ妻子らハ哭々あとにつきて皈りけるとぞ此ものがたりハ牧之が若かりし時その事にあづかりたる人のかたりしまゝをしるせりこれのみならず雪頽に命をうしなひし人猶多かりきこの雪頽に家をおしつぶせしこともありき其怖さいはんかたなしかの死骸の頭と腕の断離たるハ雪頽にうたれて磨断たるなり

○寺の雪頽

雪頽ハ敢て山にもかぎらず形状峯をなしたる処ハ時としてなだるゝ事あり文化のはじめ思川村天昌寺の住職執中和尚ハ牧之が伯父也仲冬のはじめ此人居間の二階にて書案によりて物を書てをられしが窓の庇に下りたる垂氷の五六尺なるが明りに障りて机のあたり暗きゆゑ家の檐にいで家僕が雪をかくとてうちおきたる木鋤を

農夫頓智借雑圖

京水畫

とりかのつらを打をんとて一打うちけるに此ひきあやまりけん里言ふつらをうるこゝろとのかたるなくふ古言ふもしく本堂に積る雪の庁屋根石くとうるごとくもち土蔵のやとりに清水がりの池あり一ふ和尚ゆくまでに押落さるに池に入るべきをうるごとの勢ひに身は手鞠のごとく池をもたゝこえて掘揚る雪に半身を埋めるまゝあしさけびてるこるに庫裏の雪をかりあるものづら馳きたり持る木鋤あく和尚を掘ひとしけまば和尚大に笑ひ身ををつるに聊も疵うけず耳に掛る眼鏡さへつゞかく不思議の命をたもつるひぬ此時七十余の老僧こゝゞ前ふりる何村の人の不幸に比べば万死に一生をえたるを天幸といひつゞ齢も八十余まで无病にて文政のを多に遷化せるまで平日余に示していはく我雪頼に撞るこゝと紀筆を採りて居るに尊き佛経なりこゝ為たゞもはそ一字毎に念佛をして書居るに雪頼に死まべきりこを不思議に命助るこゝは一字念佛の功徳にやありけんさば人は常に神佛を信心しく悪事災難を免るをいのるべこゝ神佛を信ずる心の中より悪心はいでぬものゝ悪心の无が災難をのゝ第一とをこゝらまき今も猶耳に残るに人智を尽して

のちたゝざる大難にあふは因果のたゝるあむる処なるに人はたゝりたりてこゝ人家の雪頼ゆる家を潰せこゝ事人の死るるごとあまたに見聞たるごとくもさのこゝはとてたるさば

○玉山翁が雪の圖

きたのとこゝ玉山翁が梓行せるこゝ軍物語の画本の中に越後の雪中にたゝうひこゝとの圖あり文に深雪とありて去るも十二月のなるに紀る軍兵とものが挙止をなるに雪は浅く見ゆ越後の雪中馬足はたちまちこゝ雪中牛馬を用ひぬらんや軍馬をやたるを馬上の戦ひなる雪あきた国の人の画作なるべば雪の実地をたるべく画者も誤るべく越後雪中の真景は甚しくたゞりたるこゝ画は虚もまりべ(ざるべ)そのさはあこゝ死もあるべけまどあまり和たゞひこゝまば玉山の玉は瑾あるこゝも惜けまばかりて書道の交りにまたるこゝ牧之が拙き筆にて雪の真景種く寫こゝ猶常にあるべる真景もゞるこゝ春の半ばこゝ三国

嶺ハ千仞絶壁の高きに在る温泉に旅りそのあたりの雪を見つるに高き峯とりまろくしるるもの也ハ五七間ばかりの四角或ハ三角なる雪の長さハ二三十間もあるんと谷ハ谷にたてかりしる上ハ幾つとなく大小さまざまなりしるるもの雪国にうまれて見ゆさへその奇観ことゝゝ尽くしがたくの真景をも其産ゝうゝとりしるを添て贈りしに玉山翁ゝ返書に北越の雪我ゝ机上にふりかゝるゝおとく見をかとろりいたるの圖をなかめ多くあつめ文を添させ私筆ゝ例の繪本とゝゝいゝゝ其書雪の霏ゝしるゝごとく諸国に降さんるゝ我ゝ筆下に在りとゝいまさる書輸今猶牧之ゝ書筏にをさめあり此書なくゝゝ黄なる泉に玉山を沈しハ惜べし〳〵

○越後縮ちゝみの文字普通の俗用にちゝみと又ちゝみと訓ずるなり

縮ハ越後の名産にして普く世の知る処なれど他国の人ハ越後一国の産物と思ハ誤なり我住魚沼那一那にかぎる産物と他所に出るもあれど僅ゆゝく其品魚沼ハ比べ〳〵そもく縮と唱ふるハ近来のゆえなり〳〵ハ此国にても布とのみいゝり布ハ紵を織る物の総名なれバなるべし〳〵今も我ゝあるゝ老女なれど今日ハ布を市にもそなへるゝにハ古言なるものなり東鑑を案るに建久三壬子の年勅使飯落の時鎌倉殿より餞別のなをしるる條に越布千端とあり猶古記ものゆゝ又べけれどさのゝ索も後のゝのゝハ室町殿の營中のなどを記録せしまる伊勢家の書ゆハ越後布とのゝなのまと見えてりさまハむゝ〳〵より縮ハ此国の名産なりしるゝけ〳〵愚案ハむゝ〳〵の越後布ハ布の上品なる物なりしを後ゝ次第に工を添て糸に縷をつよくかけて汗を凌ぐ為に綿せ織なるゝんゆゝに絁布といひなるをたゞきてちゞゝとのゝらひつゝん欲かくて年歴るゝゝに猶工に成りて地を美くせんとて今の如くちゝゝハ名のゝに残りしるゝん我ゝ稚なりし時に知ひてゝゝるに今ハ物の模様を織るなど錦をなる機作ゆゝを〳〵劣だいなるもづゝき模

様をもつり縮も飛白も甚上手ふるりて種々の奇工をいでもり機織婦人
こちの伶俐ゆりる故ぞ〜

○縮の種類

魚沼郡の内ゆく〜縮をいでる事一様ゆらぶ村ふよりて出る品ふさゞあり〜ふ
自らむり〜より其品ふのゝ熟練して他の品ふ移らざるゆえゝ其所その品を
産ぜ事左のごゝ〜

▲白縮ハ堀の内町在の村〜組〜ふ組の内又浦佐組小出嶋組の村〜
▲模様ある或ハ飛白いふゆる藍錆とふ塩澤組の村〜
▲藍縞ハ六日町組の村〜 ▲紅桔梗縞のるゆハ小千谷組の村〜
▲淺黄纈のるゆハ十日町組の村〜〜又緋の弁慶縞ハ高柳郷ふかぎゝり右
いづまゝ魚沼一郡の村〜之此餘ちゞゝを出る所二三ヶ村あゝど専らふせゞゝバ
ちゞ〜〜舎て村〜さゞ縮ハ右村里の婦女らゞ雪中ふ籠り居る間の手業〜

いよゝゝ来年賣べきちゞゝをおゝ〜の十月より糸をうゝゝゝ次の年二月
ゆゝゝふ晒〜をいる白縮ハうちゝゝる所ハかりゆゝゝゝ人ハ文あるものゝど
ふハかりゆゝゝゝども手練ハよく〜ゝゝるものゝ村〜の婦女ゝちゞちゞゝふ丹精を尽
をゝゆゝく〜小冊ふハ尽〜〜ゝ〜其あ〜ゝ〜を下ふ記せり

○紵

縮ふ用ふる紵ハ奥羽會津出羽最上の産を用ふ白縮ハ多くゝ會津を用ふ
ゆんづく〜影紵とふ〜の極品〜ゝ〜宋澤の撰紵と称ゝゝも上品〜越後の
紵商人〜の国〜ふいゝて紵をゝゝて国ふ賣る紵を此国ゆゝゝゝとふゝ
古言〜麻を古言ふゝとふ〜ハ綜麻のるゆ〜麻も紵も字義ハゆゝく布ふ
織べき料の糸をふゝ〜紵を苧ふ作ゝハ俗也と字書ふゝゝゝり

○紵績

余一年江戸ふ旅宿せ〜頃或人ふゝゝ縮ふ用ふる紵を績ふハその処の婦

人誘ひあつめて一家ゐあつまりその家ゆゑ用る紵を績て此人くたびれそのの家をめぐりて績と聞しがいろゆとらひきいろる人どかる空言をびいひふ〳〵けんさりゆゑ〳〵魚沼一郡も廣きゆゑ右ゆうゐもる処もあるゆゑんこひありともこゝ下品のちぐさゐ用ふる紵のゆゆゑん下品の編のゆゆハ姑舎て論ぜび中品以上ゐ用ふるを績ゆハうむ所の座をさだめちき体を正し〳〵ゆゆ呼吸ゐつまて手を動せて為作をゆゑ定座ゐ居〳〵假ゐ居て其為作をゆゆばゐのづ〳〵心鎮ぜし〳〵く糸ゐ太細いぞきて用ゐたちぐさ〳〵常並の人の紵を績ゐハ唾液を用ふまどゝちぐさの紵績ゆハ茶碗ゆうの物ゐ水をさくはひくことをのちふ事毎ゐ盥ハ座を清めてこゝをゆゑり

○綾綸

糸ゐ作るゐも座を定め体を囲位るゆゆ績ゐおるゆゆ綾綸その道具その手術その次第の順その名ゐ呼物許多種くあり繁細の事を詳ゐせんハくだ〳〵

けまハ言ゑもくうきもくうよりありをるまでの手作をゆゆく雪中ゐ在上品ゐ用ふる処の毛よりも細き糸を經兆舒疾してあつゆゆ雪中ゐ篭り居る天然の温気を得ざまハ為〳〵難〳〵温気を失つハ糸折るゆゆありをまし〳〵ところ力よりり断るゆあり是故ゐ上品の糸をあつゆ所ハ強き火気を近付ぢ時ゆより織るゐ後て二月の半ゐ〳〵り暖気を得て雪中の温気薄き時ハ大る鉢ゆうの物ゐ雪を盛て機の前ゐ置その温気をかりて織るゆもありてまゝのゆゆ付て熟思ゐ緝を織ゆハ蚕の絲ゆゑ陰熱を好布を織ゆハ麻の糸ゆゑ陰冷を好むさて緝ハ寒ゐ用ひく温ゆ〳〵め布ハ暑ゐ用て冷ゆ〳〵む是ハ天然ゐ陰陽の気運ゐ属る所ゆゆんゆ件の如く雪中ゐ糸とゆ〳〵雪中ゐ織り雪水ゐ洒ぎ雪上ゐ晒ゆ雪ありて編ありさまハ越後編ハ雪と人と気力相半して名産の名あり魚沼郡の雪ハ編の親とゆべ〳〵蓋〳〵薄雪の地ゐ布の名産あるよしハ糸の作りゐよるゆゑ越後編ゐ比べ〳〵知る事〳〵

○織婦

凡織物を専業とする所にては織人を抱へおきて織るを利とし縮ふもいろ〳〵別ふ无き一国の名産なるべども織婦を抱へおくる家々にあるいんとなるべく縮を一端ふなるまでふ人の手を労するゆゑ〳〵尽〳〵がて〳〵なるべく手間ふ賃銭を當て算量するゆゑあるべく雪中ふ篭居婦女等が手を空くせざるのこの活業こ縮の糸四十綾を一升とのふ上このちこふ經糸二十升より二十三升ゆも至る但一筬ふ二ちぢづ通もあるべく一升の糸ハ八十綾こ布幅四方ふ緯糸もこを隨ふ〳〵併さるべく地をなさべ糸ハ猶多くなるべくさるべ僅ふ一尺あまりを織るふも九百二十度手を動もてを以て一端を二丈七尺とし二万四千四百八十四度手をもてつかせざるべ端をなさべ是ハ其凡をいふのを定尺とも績もぐるより織おろし一晒しあげて端ふなるまでの苦心労繁おりひとるべ〳〵ちぐものこふハきぐ〳〵ぐ織物ハもべ〳〵然なるんが目前ふ我が視ところなるハふこかる縮を僅の價ゆて自在ふ著用まるハ俗ふいふ安いものこ縮をある処のこのハ娶をえらぶゆも縮の伎を第一とし容儀ハ次ともこのゆゑふ親さるものハ娘の幼より此伎を手習まるを第一とし十二三歳より太布をおりなるハもゆ十五六より二十四五歳までの女氣力盛なる頃ふあるべきべ上品の縮ハ機工を好せべ老ふ臨でハ綺麗ふ光澤なくして品貴ふでりてえも貴重の尊用ハさここ極品の誂物ハ甚品ふ能熟〳〵る上手をえらび何方の誰〳〵こ指ふをこるべゆゑこのかぐふ〳〵ぐゆゑとて各〳〵伎を励むるこかる辛苦ハ僅の價の為ふ他人ふまる辛苦こ唐の秦韜玉が村女の詩ふ最恨むハ年〳〵金線を壓て他人の為ふ嫁の衣裳を作るといひしハ宜なる哉〳〵

○織婦の狂

ひとせある村の娘ちぐめて上〳〵のちぐをあつ〳〵らまし〳〵ゆ糸大ふよろこべ金文を論ぜべこと〳〵さるふ手際をこせて名をとる〳〵ぐやとる〳〵績ちぐめとり人の

御機の霊威織女狭狂の圖

娘の男
京水筆

手をかゝせ丹精の日数を歴てそのちゞみ織おろしたるをさらしやより母が持きたり
しときって娘ハよゆく見さく物をあらけるをもうちかきてひろげ見まバいろふしてら
汝わどある煤いろの暈あるを見て母もいろゆせんかりしやとゞく縮を顔にあてゝ
哭倒まけるがこまより發狂となりさまぐの浪言をのゝしりて家内を狂ひそろ
を見て両親娘が丹精したる心の内をおもひやりて哭ふなみけり見る人ゝもあはまがり
てなみ袖をぬらしけるとぞ友人なるがしるものがたりせり

○御機屋

貴重尊用の縮をおるゆハ家の辺りにつもりし雪をもその心して掃きて住居
の内ゆそみろ畑の入らぬ明りもよき一間をよくゝ清めあらたしき筵を
しきみまべ四方に注連をひきこまし其の中央に機を建る是を御機屋と唱へ
て神の在がごとく畏尊ひ織人の外他人を入まぜ織女ハ別火を食し御機
にかゝる時ハ衣服をあらため塩垢離をとり盥漱きことぐく身を清む日毎

にかくのごとし紅潮をいむ乎ハ勿論之他の娘らまで今日ハ誰との御機屋
を拝にまゐるなどゝうにいふ至極上手の女にあらざまバ此おそこやを建るゝ
なけまバ他の婦女らがこまを羨み比諭バ階下にありて昇殿の位をつゝむ
がごとし

○御機屋の霊威

神ハ敬ふにより威をますとハ宜なる哉かりそめの物も守らとして敬ひ信
をまバ霊あるゝ空しからぬ人のおさをそてる草鞋ぶに衆人の信せしにより
てのちゝハ草鞋天王とて祭りし事五雑組にみえたりましてや神くまる
を敬バ霊威ある其ゝの天道ハ人の知を以てはかりがたくてにある村の娘
御機やにありて心を澄しおそこをおりて居たりしに傍の窓を外と
くと音あるものあり心ならざれどおもへおまハ立よりてひらきみんとしたりしに
心を通せ男ゝなりふし人目の関もなかりしハ心うましくおそこやをいぞ

家の後ろにいたり窓のもとに立たる男を将て木小屋に入ぬかくて娘の母皈り
來りおそしやと娘のをらぬを見ていぶかりあたりにその名をよびけれバかの
木小屋にきこへつけて遽驚き男ハ逃去り娘ハ心顛倒して身を撤たるを打倒れ
いゝさやおかけ入りそのまゝ御機にまよりて織んとしけるに倏急仰向に倒れ
落血を吐て絶入けり母此状態を見て大におどろき紅しつよりて助け起し
まづ御をもとよりいだしさまざまにいたはりしが気息あるのミにて死したるが
ごとし父ハ同村のなにがしが家に在しをよびくだし医をまねきて薬など与
へしかどその志るしもなく両親ハさらになりよりまかせよりしもの娘の側
に在てなきさきしぐるつる手を束て死を俟のミなる所へひとりの男來りさも
恥らふさまにて人の後に座し欲言としていたく頭を低て涙をおとしけるハ
とまをきれバ同村の某が次男なりけり此男かくて膝をすゝめ娘の母に對ひ声を
ひそめていふやう今ハなにをかつゝまん我ハ娘御と二世の約束をなしたる

ものなりされど人なきを見てむすめごを誘ひいだししにおん身のかへりたまひし
ことなきにおそれきれバ逃さりしがむすめごがかゝる災ありしと聞てつくづく思ふに
撤したる身をさきまて負きおん機にかゝりぬひたる御罰なれきれと我ら
なる罪なきれバ人ハしらずとも余処目におそれハそらおそろしく命をかけて契り
たることバにもながくりと、かのむすめごの命に代りて神に御罰を詫ゆかん
さるゆへも此まゝなるむすめごが死ぬいかで我が命をめさるべしとて今をそるるべしと人々
これぞよき証人なれといひつゝ赤裸になりて髪をもさかむ井のもとにおもむき寄
あつて水を浴雪の上に蹲居てなにやらん唱へていのりけり時しも寒気肌
を貫くをりふしなれバ凍も死ぬべきありさまなるにさりとハさとき人々もちぢめて
それと知り實にもとてかの男がかく水を浴ていのりけり神明かの男が
實心を憐みたまひけん娘の覚るかことなく納受ありけん娘目の覚るとともにおき
あかり母をよびけれバ衆奇異のおもひをなしむすめの側にあつまりていふに

とゝの娘ハうるはしくてこゝの母ハうまれつきのよし。いへけるとばかりなれども御機ハよりしゝハ覚えしゝがのちハちゝぶとゝの母ハあまりのうまれつきさふかの男ゐもあらせんとせしゝふいつゝ立さりけんそゝぶりなかゝ娘四五日ハ家ゝしゝが常並の身ゐありけり歳も十七ゐまハかりに聟をと思ひをりゝるをりゝゝゐまぶかの志のび男が實心ゐ愛て早速媒の搞をこてゝ婚礼もめでたくとゝのひく程ゐく男子をまうけゝり其家今猶榮ゐ神の御冝討が夫婦の縁とゐりしも奇偶といふべし我が幼ゝり時の事くさ筆のつのでゐ記して御機屋の霊威あるゐをゐろぶもゝしむあみうしこ畏て慎む爲

○縮を晒す

晒屋とてこゝゐあこと業ゝゐ又ゝり家ゐくさゝもあもと掃ゐり
さゝしやハその家の辺又程よ紀所を見立ゝゐ假小屋を造り物をも置

まこ休息の処とゝ晒人ハ男女ともうちまりし身を倩めるゆ織女の如くゝ
さゝゝゝハ正月より二月中の爲業ゝ此頃ハいまゞ雨も圍も平一面の雪の上ゐ
さゝゝこの上をさゝしゝ場とゝるもあり日の内ゐさゝしゝ場を踏へしゝ処ゐゝゝば
手頃の扱ゐ柄をつけゝ物ゐて雪の上を平ゐふゐゝしゝくゝかくゝぜゞまゝば夜
の間ゐ凍つきてふゝしゝゝ処そのまゝ岩のごとくゐるゆゐゝ晒場ゆハ一点の塵も
あゝゝせゞまゝば白砂の塩濆のごゝしゝゝゝ白ちゞゝハありもろしゝゝるまゝをさゝゝゝ餘の
ちゞゝハ糸ゐ洗ゝりゝゐを拐ゐうけてさゝゝゝゝゝその拐ゝハ細き丸竹を三四人ゐゝこの已
ゐゐしてゝその張ゐ糸をうけ拐ゐゞゞ竿ゐふうけゝゝてゝさゝゝゝゝ白ちゞゝハ平地の
雪の上ゐもさゝしゝ又高さ三尺ゐまりゝ長さハ布わどゐゐ横幅ハ勝手ゐまち
せゝゝゝのゆゐ雪ゐゆくつゝりその上ゐちゞゝをのゝしゝ ゐゝゞくさゝゝゝもあり
ゝ せゞまゝば狗ゐど踏越てちゞゝをけゞまゐゐゐゝゝゐ拐をゐゝゞくさゝしもそる
くゝゐその場所の便利ゐまゝゞゐゐ一定ゐゝゞゝゝて晒しゝゆハ編ゐゐあゝ糸

雪中晒編圖 此所もすべて皆雪の上へ

あもあまた一夜灰汁ふ浸し明の朝幾度る水ふ洗ひ絞りあげて手のごとく
さらさら　貴重尊用の縮をさらひ
場をもうけようづふ心を用ひくさらさらの御機をあるふ同じ我国わくハ
地中の水気雪のあふ発動ざるゆや雪中ふハ両まて春ハことさらことを用ふ
件のごとく日ふさらを晴のつづく事ありさて灰汁ふひたしてハさらさらの毎日
かたづるを手ーて幾日を歴て白くをうーるのちさらーをうるかてさらしをハ
らんとをる白ちぢをさらひをりつ朝日のあらくと昇て玉階平上ふ列さる
水晶白布ふ紅映しる景色ものふたらぐーかる光景ハ雪ふまるこの暖国
の風雅人ふ及ぶこておもうて凡ちぢを晒ふハ種くの所為あるともてふハ其
大器をもうるのこ

○縮の市

市場とてちぢの市あるまふらる堀の内十日町小千谷塩澤の四ヶ所こ

初市を里言ふちぢまわるこの雪どひの簾の明をうこ四月のちぢめふ有
堀の内よりちぢむ次ふ小千谷次ふ十日町次ふ塩澤いづまも三日づ間を置
てあり一年ふよりて右四ヶ所の外ふハ市場ふ十日町ふハ三都呉服問屋の定
宿ありて縮をこふ買市日ふハ遠近の村くより男女をいらぢ所持のちぢこふ名
所を記しる紙簽をつけく市場ふ持よりその品を買人ふ及ぜて賣買の直
段定まバ鑑符をここしてその日市まて金ふ換ふよて半年あまり縮のる
ふ辛苦もこふハ此初市の為ふまバ縮賣ハさこてふ那るもの人の濤をうこ
せ足こを踏まこ肩こを磨る方の品こもちふ店をうまく物を賣る遠く来りる
ものハ宿をもとむるもあまバ家毎ふ人つどひ香具師の看物藥賣の弁舌人
の足をとめて錐を立べき所もあるぬやうこ此初市の日ハ繁花の地の桑饒
ふもをさく劣ぢ右ふいふ四度の市をうてのちも在くより毎日問屋来りてちぢをうる
又ちく仲買のもの在くわいうてもうふこ六月十五日迄夏ちぢこをうひ
十七日より翌年の初市縮の精疎の位を一番二番とふ價の高下ふよてハ定

あまどもその年〻ふりてそこ〻〻のさかひあり市の昌ふその相場年の気運ふつまづく自然さだまる相場よりけまバ三をんのちぐ〻ニをんふのぐり二をんも一をんふ位も前ゐもいつるぐ〻ちぐ〻ハ手間賃を論せざるものゐ誰ぐあり云ちぐ〻ハ初市ふ何程ふ賣うりよわど手ぐわぐりうりうぐらるを誉とし或ハその伎ふよりて要ふゆゑんといふく娘もあまバ利を次ふして名を争ふおのゆゑふ市ふちぐ〻を持やゆハ兵士の戦場ふむかふぐ〻ぐ〻そちぐ〻の相場ハ大ぐりハ穀相場ふかゆぐ〻うして事ハ前後七年幽ゆまバ穀ハ上り縮ハ下る年豊ゆまバ縮ハ上り穀ハ下る豊凶の万物ふ係る事此一を以て知べし〻さまバ万民豊年をいの〻ぐ〻めや

○わふら

我塩澤の方言ふわふらとのふハ雪頽ふ似て非るものゝ十二月の前後ゐあるものゝ高山の雪深く積りて凍る上へ猶雪ふり〻降り重り時の気運ふよりていまだとけず沫〻きぐ山の頂の大木ふつもりゐる雪風ゆゑの為ふ一塊り枝よりおちゝ山の聳ふ随ひて転び下りまろびゆく雪を丸て次第ふ大をゆ幾万斤の重きをゆ〻るもの幾丈の大石を転し走ぐごとく〻ゐ〻が為ふあるゐ〻ゐ〻ゐ雪ふ〻せるもの〻雪の洪波をゆして大木を根こぎふゐ大石をもふ〻ふ〻ふ人家をもふ〻ふ〻潰まるゆ者ハ〻ゐ〻ゐ此時ハ〻ゐ〻ゐ暴風雪を吹きち〻〻凍雪空ふ布て白昼も立地ふ暗夜とゐる事雪頽ふちゆゑ〻ゐ〻ゐ前ふもいつるぐ〻ぐ〻〻そこ〻ハその〻〻〻もあまバそ〻ゐ〻ゐるゐまど此わふらハふとゐまるゐ〻ゐ〻落下るゐ不意をうゐ〻て逃んとゐまバ軟ゐ〻雪深〻て走りぐ〻十人ゆ〻て一人助るハ稀〻幾十丈の雪人力を以て掘るあと〻〻ぐ〻ぐ〻ゐ三四月ふいたり雪消てのち死骸をゆる事ありわふらを処ふよりて。をゆて。ゐゆ。ゆゑ。ゆハ〻りともいふ山家ゆそハゆぐ〻わふらを避んとゐ其災ゐゆ地理をたゆて家を作るわふらふ村ゆどつぶゐる奇談とゐどろ聞

とるゞあまさあまびとうるさけまべ　ちるさべ

○雪中花水祝ひ

魚沼郡の内宇賀地の郷堀の内の鎮守宇賀地の神社ハ本社八幡宮之上古より立せ給ふとゞ縁起文多けれども省く霊験あらたなるハ普く世ふ聞ゆ処ゆり神主宮氏の家ふ貞和文明の頃の記録今ふ存せり当主ハ文雅を好吟詠ゆも富り雅名を正樹とゝふ余も同好を以て交を修む幣下と唱る社家も諸方ふあまさある大社之此神の氏子堀の内ゆ娶をむゝ又ハ婿をとりゆゆ神勅として婿ふ水を賜ふこと花水祝ひとゝふ毎年正月十五日の神事之新婚ありつる家毎ふ神使をゆつるゆゑ門おわき時ハ早朝よりして黄昏ふいゆる時もあり友人嘿斉翁曰堀の内の人花水祝ひとゝふゆハ淡路宮瑞井の井中ふ多遷花の落る祥ありしゆの日本紀ふ云へるふ盪鰐して花水の号ちふ起立ゆやとゝいふまさまべ新婚の婿ふ神水を汲る当社の神秘とぞさて

当日新婚ありつる家ふ神使ゆゞき人ハ百姓の内旧家門地の輩神使を務ゞき家定めありてその中ゆく服忌ハさゝゝ寡ある者家内ふ病人あるもの縁類ふ不祥ありしゆの皆除くいさゝも家内ふ故障なく平安無事なる者を撰び神支の前の朝神主沐浴斎戒し斎服をつけゝ本社ふ昇りえらびなる人々の名を書て御圖ふあげ神慮ふ任て神使とゝ神使ふ当りなる人潔斎して役を勤む是を大夫とゝふ嘿斉翁曰ことゝちゝ伊行神人ことゝゝり大夫ハ俚言の称さて当日正月十五日神使本社を出るその行装ハ先狩箭三本道具臺笠立傘弓二張雑刀神使侍烏帽子素襖次ふ太刀持長柄持傘さゝかゝる供侍二人草履取跡鎗一本ちらの温く神庫ふ次ふ氏子の人々大勢麻上下ゆて随ふかゝる行装ゆく新婚の家ふいゆるゆゑその以前雪中の道を作り雪ゆて山ちちのせりる所ハ雪を石壇のせりふつゝり或ゝ雪ゆく拔ぎめく処を作りて見物のなりとゝこゝろゆるゆまこの人夫を賞もとるゝさてその家ゆてハ家内をとゝくゝ清めさて其日正殿の間とゝゆる

一間ハ塩垢離ふきよめてを神使の席とし絲筵を布うゑ上座ハ毛氈をもき上段の間ハ表り刀掛をかく次の間ハ親族ハさうこまてしき人こより祝儀のおくり物をうゑおく嶋臺ゑびふ賀詠をそへうゑおのゞさゝぐゝ門ハ幕をうちよせわゞの処をあゞりあげてこれハ烏帽子の壇をもうけ玄関式臺ハ准ふ家内のものいつまも衣服をあらゝ神使をまつ神使いるときけば親あるものハ親子麻上下ゆく地上ハ出て神使をむかふ神使のさゝりとりさゝゝれたせきてうて跋扈り大声ゆて正一位三社宮使者と大呼神使を見て亭主地上ハ平伏し神使を引てうの正殿ハ座さしむ行列ハ家の左右ハ分れて隊をうもさて神使へ烟盆茶吸物膳部をいさし数献をもくむあゝくあゝ婿ハ盃を与ふ三方肴をそきむ献酬七献をかぎる盃ごとハ祝儀の小謡をうゝふ事終りて神使ハ立る他ハ新姻あり家あるハ又到る式前のごとし此神使ハうの花水を賜ふ事を神より氏子へ告ふの使と神使社頭へ飯る時里正の家ハ立より酒肴の神使社内へ飯りしを見てく踊りの行列を繰いだし一番ハ傘子錦

のうひ紀をうけ旋し端ハ鈴をつけ又裁工の物さゝゝうをさげる傘子の上ハ諫鼓を飾ることを持もの二人紫ちりめんゆて頬をつゝてむもひさとおゝゞ紅絞ゝゞを庁裃裃ハかゝる嘿奇白ゝゞ祭礼ハ用ふる傘子といふる物ハ吏ハ羽蔭蓋の字を訓り所謂織ハしてきゝる神輿鳳輦を覆ひ奉るべき錦蓋と　とのゝり猶説ありしが長けきバ肩くさて二ゝんハ假面をあて鈿女ハ扮こる著一人箒のさゝゝハ紙ハ女冠をゝゝるをつけくかゝく次ハこゝも假面ハて猿田彦ハ扮こるもの一人麻あゝく作りこる縵帽やうの物を冠り手杵のさきを赤くゝて男根ハ表示こるをうゝゝ三ゝんハ法服を美こしくかゝりたる山伏螺をふく四ゝんハ小児の警固警固おりひく身をゝゝりて随ふ次ハ大人の警固麻上下杖を持て非常をいましむ五ゝんハ踊の著大勢花やうゝる浴衣ハ正月人数ハ奴　色ある細帯をゝゝ群行里言ハこゝをでうゝんちやうとふこゝハ降臨象ゝゝゝ皇孫日向の高千穂の峯ハ天降りのひしハ縁るの心ゝんと嘿

堀の内驛花水祝ひ
噪劇の図原本の
草画を此ホ載て
別ホ至細の図を
示さるものハ
梓刻の労を
省ま在り

梅ときて春おこ
この水や芳しも
水を祝ひ　堀の内庄
山東庵京山

鈴木牧之画

翁ひとり摺説ありしがそぶくさて聟の方にては此をどり場をもうくる人のまへにあり
まうけおきあたらしき莚をしきあたらしき手桶二ツに水をくみいれ松葉と
昆布とを水引にてむすびつけむしろの上におき銚子盃をそへおく水取とて
聟に水をあびせる者二人副取とて外の二人おなじくたすきかけはちまきしげに
いでたつむかしは白き細帯にてをどりのさまをまなぶをどり家にいたれば行列
ひらきて踊人かのむしろのめぐりにむらがりてうたひつゝをどるその唱哥に
「めでたく〳〵の若松さまよ枝も栄る葉も茂る「きんやめでたや花水さんやせなあり」
あびせん我がせなに」をりかへし〳〵声をかへてうたひをどる事慣たる踊の
けいごかの水とり副取もその程を見て聟に三献を祝はせ手桶の水を二人して
左右より聟の頭へ滝のごとくあびせかくるさまを見て衆人抃躍てめでたし〳〵
と賀ふむこはそのまゝ己が家にはせ入りをどりは猶家にもおし入りてをどりう
たふ事七八遍にしてどろ〳〵と立さり再びそのごとく列をなして他の

聟の家にいたる事またをどりは宿役の家さてはよしみあるものゝ家にも入
りてをどりありく之田舎ものを視る事まことに此日は遠近の老若男女
おしあひてよろこびて蟻のごとくあつまりおしなりて熱閙さらに筆下に
尽しがたし○按るに聟に水を沃ぐ事は男の陽火に女の陰の水をあびせ
て子をあらしむるの呪事にて妻の火を留るとの祝事也此事室町殿の
頃武家の俗習より起りて農商もこれに倣ひ所々に行はれし事物に見え
たり 貝原先生の歳時記には松永弾正が聟事より起るとあり 江戸にては宝永の頃までも世上一同正月十五日の
事として祝ひのためにありて大に流行しもの聟に恨ある者事を水祝ひに
よせてさま〴〵の狼藉をなし人を害わりて人の死亡にもおよびしと聞へ
ありしゆゑ正徳の頃国禁ありて事絶たりとかくはむかしく物語とこゝに
ものに見えたり 国初以来の事を記す写本元禄中をさうにへたる人の老ての作なり 件の花水祝ひは神秘と有ば
別にゆゑよしもあるべし あるべしと雪のついでにその大畧を記して好古家

の談柄に具そなへ

○菱山の奇事

越後の頸城郡松の山八庄の総名にて許多の村落を併合する大庄なれど も山間の村落にして一村の内とはいへども平地なり こゝに松代とかゝる所のみ平地に て農家軒を連ね外百番の謠ふこゑ〳〵松山鏡とかゝるも此地なりそのうしろに ある鏡が池の古跡もてふあり今は池はもはぬやうに埋まりてその跡ばかりのみ きり按るに松山かゞみのうしろに鏡破の繪巻とかゝるものを原として作るなら ん此巻にはゆゑ右の松の山の事見えたりさて松の山の庄内に菱山とかゝる 山の形三角なるゆゑの名なるべし山ふもとに処に須川村川ゆゑにて菖蒲村と かゝり此ひと山毎年二月に入り夜中ゆかぎりて雪頽あり其ひゞき一二里に 聞ゆ傳てかゝる白髪白衣の老翁幣をもちてなぎなたに乗り下るとかゝる此 なぎなた須川村の方へ二十町余の処真直に突下る年は豊作と菖蒲村の方へ

斜に下りてこれ年は凶作と其験少も違ふ事なし年の豊凶雪頽に係る事此山に のみ限るも一奇事とかゝべし

固ふかゝる余が旧友寺泊に住丸山氏の医家祖父は博学の聞えありし人なりき 余二十年前丸山氏の家に遊宿せしとき一時祖父が宝暦の頃の著述とて越 後名寄とかゝる書を見せしに三百巻自筆の写本にて名寄とはいへども越後 の風土記なり一国の神社仏閣名所旧跡山川地理人物国産薬品の類すべて 部を分図をいとなみて通暁しかくまでの精撰にて此書に右菱山の説も粗見えた どさのみならずまた菱山のみをかかふかつきくこの書の事をおのれにぜしがかゝる精撰 大成の書も空しく秘笈にありて世に出ざるが惜けれどもかゝるなり

○秋山の古風

信濃と越後の国境に秋山とかゝる処あり大秋山村とかゝるを根元として十五ヶ村を なべて秋山とよぶ秋山の中央に中津川とかゝるありて奥沼郡妻有の庄を川の東

西に十五ヶ村あり東の方に在る村は●印は越後にぞくせ▲印は信濃にぞくせ●清水川原村人家二軒ありしかれども村の名によぶ
▲上の原十三軒
●三倉村三軒人家●中の平村二軒●大赤澤村九軒●天酒村二軒▲小赤澤村二十八軒
▲和山五軒西にある村●下結東村●逆巻村四軒●上結東村二十九軒●前倉村九軒▲大秋山村
人家八軒ありて此地根元の村ゆゑ相傳の武器なども持しものもありしが天明卯年の凶年に代
をまもりてつたえ猶さかえしに一村のこらず餓死して今は草原の地となりしときけり
▲屋敷村十九軒▲湯本温泉あり此地東の方は苗場山天に聳えて連岳ともにつゞき西に赤
倉の高嶺雲を凌て衆山とともに双ぶ清水川原は越後の入り口湯本は信濃に越るの
険路なるのみ一夫是を守れば万卒も越え難き山間幽僻の地也里俗の傳へに此地は
大むかし平家の人の隠れたる所といふ牧之謂らく鎮守府将軍平の惟茂四代の后
乱奥山太郎の孫城の鬼九郎資国が嫡男城の太郎資長の代まで越後高田の辺
鳥坂山に城を構へ一国に威を震ひしが謀叛の聞えありて鎌倉の討手佐々木
三郎兵衛入道西念としばしば戦ひ終に落城せり此時貴族の落人などの此
秋山に隠れしならん里俗の傳へに平氏といへるもよしあるに似たり此秋山

は古の風俗おのづから残りしと聞しゆゑ一度は尋ばやとおもひ居りしに此地を
よくしりたる案内者を得たりしゆゑ偶然おもひたち案内が教にまかせ米味
噌醤油鰹節茶蝋燭までを用意して従者におはせて立いでしは文政
十一年九月八日の事なりその日は秋山に近き見玉村の不動院に一宿次の日
桃源を尋ぬる心地して秋山にさして入りぬさて入り口に清水川原といふありこゝ
にいたらんとする道の傍に丸木の柱を建注連を引たるありて中央に高札ありいか
なる事ぞと立よりてよめば小童のかきたるやうのいろは文字にて「ほうそうあるむら
のものはこれよりいるまじ」トしるせり案内曰秋山の人は疱瘡をおそるゝ事
死をおそるゝが如しいかんとなればほうそうするものあれば我子といへども
家に居らせず山に仮小屋を作りて入れおき喰物をはこびやしなふのみなり
銭あるものは里より山伏をたのみて祈らすれどもありきたれば九人にして十人は死を
るとぞ此由なれば秋山の人他所へゆきてほうそうありとしれば何事の用をも捨て

逃かへるとぞ されバ此地にてハ疱瘡せる者甚だ稀に十年に一人あるかなしなりと語り
さて清水川原の村にいたりしに家二軒あり（家居の作りさま他所にかはりて高し その下ハ下に牛屋し）
にやすらひて立出しにこれよりまづ猿飛橋を見玉へとて案内ハ前へ立てゆく此
秋山の道ハすべて所の人のたよりよくすべきとのみひらきてある道にて牛馬ハさらに往
はざる所なれバところどころに道狭く小笹など深くしてからく道をもとむる所もあり
なりかくてかの中津川の岸にいたり岸の對ひ逆巻村にいたる所に橋あり猿
飛橋といふ橋のさまを見るによしや猿にても翼あらざれバ飛べくもあらじ両岸ハ
絶壁にて屏風をたてたるが如くなれども岸より一丈あまり下に両岸よりさし
むかひたる岩の鼻ありこれをたよりとして橋を架したる橋ある所へ下らん為に
桟をかけてあり橋ハ直なる丸木を二本ならべ細木を藤蔓にてあみつけたるなり
渡りハ二十間あまり橋の廣さハ三尺にたらず欄杆ハもとより作らず橋を渡りて
對ひの岸に藤綱を岸の大木にくゝし下げてありこれに縋りて岸にのぼるとなり

ともいでたるさへ危けれバ芭蕉が蝶も居直る笠の上といひし木曾の桟にまさるべき
く劣ぞ此橋を渡るにやと問ふに案内がいふ今日ハ此岸につきて東の村々を
見玉ひて小赤倉村にいたり玉へバ程よき道なるべし小赤倉にてハ知る人もあれバ宿
をもとむべしといふ橋をはなれておぼつかなき岩にこしかけて墨斗とりいだし
橋を寫しなどして四辺をみわたせバ行雁峯を越て雲に字をならべ走猿梢をつ
たひて氷に画を寫せ奇樹崖に横たはりて竜の眠るが如く怪岩途を塞ぎて虎
の臥せるに似たり山林ハ遠く染て錦を布き碉水ハ深く激して藍を流せり金
壁双び緑山連りたるさまハ画にもおよばざる光景に目をよろこばせバまどひつゝひかへたるに
農夫二人きたりおのおの叢を背負ひかの橋をわたらんとて岸にたちてこれを
みれバかの棧を石壇のごとくふみくだりて橋をゆく事平地のごとくその半にいたれバ
橋揺くとして危きなりいかなる心にてか身の毛いよだちむかひこそとりつきて
かの藤綱にすがりて岸にのぼりしさま猿のごとしそのさま人のことゞもをみて目

を新ふせりさそこを奈く例の細道をさぐり高ふのぼり低ふ下りようやゞの途
をへて四里三倉村ふいたりて四八人家三軒あり今朝見玉村より用意しうる
弁當をひらくにやとあるいふ入りしふ差女ようちあつさとしひつ木の盤の上ふ長
き草をおきて木綿のやうなるものゆく撲て解分るさなしうるりの中ゆ何ふもるぞ
と問へば山ふあるいらとしふ草之をを糸ふしてあを衣を作るとしくりあを衣としふ
名のめづらしければ強くしうぶければ老女ハこうひくてとゝだ業内がかくこうりあを
衣とハ婆くどの暑うあをとのふをを見ふ帯布のやうなるを袖なし羽織の
やうふきる物之茶をもひければ差女果してすぐ疱瘡の事を問ふ業内ぐのふ我ふ
ハいとより秋山を見ふきてうしものとあやさハふハ去年此さををうハなしとの
差女いくらぐ肉のものハ今年ハ井戸蛙のやうふさろぐんぐ里ハ一度も出ぬん
どとのひつくををしる茶ををれば煤を黄ぐしるやうなれば別ふ白湯をのもあ
て喰しをいりつくく此住居をるるふ礎もをえぐ掘立る柱ふ貫をば藤蔓

縛りつけ菅をあをうけて壁とし小き窓あり戸口ハ大木の皮の一枚なるをひらめて横
木ををとし藤蔓ゆそくしとあ閾もなくて扉と寸茅蓑のいらふも編屋之とて
うりそふふ作りくる草屋なるど里地より雪ハふくらんとあるバカハ強く作りくる
なるべし家内をるるハ稿莚のちぎれとさるをもきなるべ稲束のできぬ所ゆ表ふこふふとぶ
納戸も戸棚もなし菅縄ふくつりくる棚なるのとく囲炉裏ハ五尺あやり深
さハ灰まで二尺もあるゞし薪多き所ゆく大火を焼くゆ多之家ふうちくるものハ
木鉢の大なるゞ三ツ四ツあり所ゆて作るゆ多く薬鑵土瓶雷盆などいづまの家ふも
なし秋山の人家をべくこをふかゞ今日秋山ふ入りてふいくりて家を五ツ尺
ゞ栗稗を刈こむところなるべ家ふ居る男をるぞさそ婆ひしうち紡の實をひ
ろひくく山よりかりしとのふ娘をるるふ髪ハ油気もなくまろめつる稲なるを紵を
ゆて結ひふるびくる手拭ひゆくく頸巻をなし木綿給の垢づきくるゞ常なるより一尺
もくゞきふ巾二寸ばかりのもめん帯をうくろふむもをべり女のたちまち紀をるとおびの帯のせばゞ紀八古画ゆもあやさえ

えたる古風なきものなれど さきもいふ中紀の古風也 秋山の女ハみなかくの如し此女に土地の風俗なれども又やさしげ心ありハざりしバさらにはぢらひて物をもいはずして立さりけり ○かくて中の平村九軒天酒村二軒大赤澤村九軒を歴る道ハ嶮き山行して此日申の下刻すぐく小赤澤にいたりぬこゝハ人家廿八軒ありて秋山の中二ヶ所の大村也上結東ハ卅九軒有此村に市左衛門とて村中第一の大家あり幸ハ案内者の知る人なれバ宿をもとめたち入りて見るに四間に六間ほどの住居也主人夫婦ハ老人にて長男ハ廿七八次に娘三人あり奥の方に四畳ぢきりの一間ありてこゝにハ稿莚をしきてあり 正むしろをしきたる堂上にもありさ古画にもあまた見えたる古風なり 勝手の方にハ日用の器あまたとりちらしたるなかにも木鉢三ツ四ツあり囲炉裏ハ五尺の大きく深きものなさて用意したる米味噌をとりいだし今朝清水河原村にてもとめたる蕣茸にこの芋などとりそへて案内が料理をとて雷盆をとらへバ末の娘が棚の上よりとりいだしたるを見れバ常にハつかはざるとみえて塵をつけたるなりのちにきけバ此秋山にすりばちのあるハ此家と此本家のみとぞ此地にて近年豆を

作りそめしゆゑ味噌をもつ事なれども麹を入る事をせざれバ汁にするゆゑあぢはひなしとぞさて此家にも別に竈ハなくみな炉にてものを煮ることゆゑ夜も火をたけバ姫小松を細く割たるを燈として光り一室をてらして蠟燭にもまさり案内が調じたるものをとりいだし椀にもり山折敷にもあまたいだせりあるじがめでたしとて芋と蕪菜を味噌汁にしたるあつものにいれぶりしきものあり案内がさし心えてひやうそハ秋山の名物の豆腐といふ豆を挽すりハせしが糟を漉ざるものなり味わるし喰をはりて後あるじがいふ茶の間の旦那 秋山のことばに人を敬して茶の間の旦那といふ茶の間をもちし人といふ事なりや とろふちに入らぞといふ此ことばさとしがたくて案内に問へバ居風呂に入り玉へといふ事也とさとしあかしぞどろぶり又ハ居り湯ともいふ 秋山にも桶風呂桶をもちしハ此家と此本家とぞありことぞ此地の人ハ冬ハ足をあらふ事をせざれバむかしのならひ也とぞ とのへり風呂に入りしにつよきにいそぎてあがりぬ道のつかれもわすれてうれしく元の炉の横座に飯りし よこざハよきを上座とするハ田舎のならひなり にこゝにハ銅鑵もありしとて用意の茶を従者が煮たるを喫ずる菓子をやりの三人の娘にもとらせ見れバ三人炉に腰かけて箕居

足を灰のあつくふる入れ珍りて之を喰ふ炉ゐ柱ゆるぐき太を惜気もなく
焼こる火影ゐ照をを又是バ末のむをゐハ色黒く肥太りて醜しをりく裾をま
くりあげて出をひらゐハ又ゞ〜けまと耻らふさゐもせゞ二人の姉ハ色白く〜玉戎
双べる美人こ菓子を喰ふ〜顔又あゐして打ゑこる面ざし愛形ハこゞゐ〜ゐ
こかゐる一双の玉を秋山の田夫ゞ妻ゐせんハ可憐琴を薪として鼈を煮るゞ如し主人ハ
里地の車をゐよく知りて話も分る筋ゐ多所の風俗をこゞ細しゐそのゐの語りこる
あゐ〜ゐ〜をこゐ記也○此地延年公稅を聞ゐいまゞも米麥を生ぜゞるゐ多
僅の貢をゐた鋤役ゐいてりて信濃と越後とゐ他の村名王の支配をうけ且那寺
をも定めまゞで冬ハ雪三丈餘もつりて人のゆきもこゐるゐ多此時人死をまバ寺ゐ
送るゐ〜ゐ〜ざまバ此村ゐ山田を氏とゐる助三郎とゐふゐの家ゐむ〜より持傳へ
る黒駒太子と称ゐる画軸ありてまを借りて死人の上を二三ぐんゐぎ〜こまを導
りて私ゐ葬る寺をさゞめざるいぜんハむ〜ゐりこまゐふくまをせこう秋山ハ山田と福原の

氏のこと右の助三郎ハ山田の後本家こ太子の画像とゐふハ太子のゐうゐ又ゐるゐこゐる氏ゐのり
て雲の中ゐあるゐ地のよ〜ゐり牧之助三郎が家ゐいこりの一軸をゐんとこゐ〜ゐ正月七
月のゐうをゞまを○此地の人上食ハ栗ゐ稗小豆をも交て喰ふ下食ハ栗糠ゐ稗
乾菜ゐゞ〜ゐて喰ふ又朽の實を食ともを○婚姻ハ秋山十五ヶ村をゐぎりと
て他所ゐのとめゞ婦人他所ゐて男をゐてバ親族不通して再び面會せゞるをむり
ゐりの習せとゐ○秋山中ゐ寺院ハさゐこ庵室もゐ〜八幡の小社一ゐあり寺ゐ
きゐ多こゐ典筆こゐる〜心あるゐの里より手本を得てゐろはゐゞをゐゞえる人
をバ物識として尊敬也○山中ゐ多牧ゐ〜牧屋をゐてゐるゐのまこ○深山幽僻の
地ゐまバ蚕ハゐとゐり木綿をも生ぜゞるゐ多衣類ゐ之〜きゐゐおて考ゞ〜○山ゐ
いらとゐふ草ありその皮を製して麻ゐ替て用を為也○菊ゐかくゐゐり〜時牧之
いらの形状をゐ〜〜くきゐゞり〜ゞ石ゐ紫るゐいらとゐふ尋麻の車ゐるゞ〜尋麻ハ
本草ゐふえゐる草の名こ麻の字ゐ熟〜こまバ麻ゐ替ても用ゐゞきゐのゐるゞ〜さ
まゞ毒草ゐるゐ〜ゐえゐり又山韭とゐふも同書ゐふゐこまも麻のゐりゐるを

べきもの也いらといふものや草の形状を聞ざりしはおしむべし○秋山の人ハすべて冬も着るまゝにて臥も常にて夜具といふものなし冬ハ終夜炉中に大火をたきその傍に眠る甚寒になれバ他所より稿をもとめて作りたる袋に入りて眠る妻あるものハかますをひろく作りて夫婦一ツかますに寝る○秋山に夜具を持たる家ハ此翁の家と私に一軒あるのミそれもちかごろのいらにて織たるいら布子のましし大なるにて宿り客のためにするのなりとぞ 牧之こゝに一宿し時此夜具に臥しきるがそのいとくさきにあたりてせの所がおかしく身にそむべきものゝなかにあらバ○稿にとぼしきゆゑ鞋をはかず男女徒跣にて山にもゆくなり 病をいのる事源氏のむかしえする古風なり○人病あれバ米の粥を喰せて薬とす重きハ山伏をむかへていのらせ○鏡を持たる女秋山中に五人ありとぞ 松山かゝみの故事おもひあはさる○此地の人すべて篤実温厚にして人と争ふことなく色慾に薄く博奕をしらず酒屋なけれバ酒のむ人なしむかしより一人も争ひてもゆるさる人なしといへり実に肉食の仙境なり○かくて次の日やぶつの橋といふをわたりて湯本に宿り温泉に浴し次の日

西の村々を見て上結東村に宿り猿飛橋をわたりその日見玉村にかへりよりきたるべく記すべきことあまたあれども文多けれバのせず 秋山記行二巻を編して家に蔵む ○栃の実の食方翁に聞しをこゝに記して凶年の心得とす 栃の実ハ八月熟して落るをひろひ蒸てのち乾し手に揉てあらき篩にかけて渋皮をさり簀に布をしきて粉にしたるをおきよくならし水をうちてしめらせしきたる布につゝみ水にひたしおく四五日にしてとりいだし絞りて水をさりて乾しあぐるその白き事雪のごとし是を粟稗などにまぜ又ハ栃ばかりも食とす又餅にもするなり 餅にするは別種なりとぞ 橡の実も喰ふその味ひ栃に似たりとぞ○此秋山にかぎらず山村他国にもあるよしを聞しまバ珍しからねどもしらざる人多ければ記せり○秋山の産物木鉢まげ物るゐ山をしきそげ縄板るゐ也秋山に良材多しといへども村中をながるゝ中津川屈曲深き所浅き所ありて筏をくだしがたく又ハ牛馬をつかはざれバ良材を出しがたく財をうる事難けれバ天然の貧地なり

秋山絶壁の圖
同猿飛橋の圖
牧之亜

畏れ入りて森る圖
京水筆

雪ンゴ堂の圖

○狐火

酉陽雜組ハ狐髑髏を戴き北斗を拜し尾を擊て火を出すとのべりかの国ハこ
もあるを我がまさしくてハ寒をおそれ物を忘れ我里
ゆくハ冬ハ人ろうゆ稀ゝ春ハいてり雪のふりかさなるころつゆりくる雪中食ハうゑく
夜中人家ハちろづき物を竊ゝ喰ふゆ甚悪むべし人ことを知るゆゑ盜ド
とく人智を以てうゑ人ハけどもまたしの間ハ奪ひ喰ふ其妖術奇ゝ怪ゝいハがゝ
時ゝてうゑを来ることぞろハ鼠のごとし狐の妖魅をあたゝゆ和漢めづらしゝ
いハもさるゆゑどのふゝ我雪中ハわりをぬとんさめ二階の窓のゆとわく書案
ハ倚る或時故人鵬齊先生より菓子一折を贈まりその夜寢んとする時狐のつゆ
おもひちの菓子折を絡縄ゆて強と縛し天井へ高く釣りおきかくてハうゑが術も施
しがたくんと自傲りしふきて朝ハつゆゑバくしる縄ハ依然としてもとのごとく
菓子折ハ消失するがごとし猶憎むべきハ人の置るゆうハ書案の上ハ

ありひきゆゑバおわひくる紙もそのまゝ残ひ尽せりその妖をゆ
しるゆ不思議之或時ハ猫の声をゆして猫を呼いでて遊し且喰ふ差狐ハ婦女
を妖して遊ぶもあり遊せし女ハうゆゝび髪をこゝでし其処ハ阿して熟睡せる
がごとしその由をゝろはるとても一人も仔細をゝりし女子皆前後をあゝぶと
いふあゝぶハあるまじけれども事を恥ていハぶるゆゑさて狐善く氷を聽と言
事酉陽雜組ハ又ゆゝハ本朝ゆても今猶諏訪の湖水ハ狐渉しを視て人渉り
すゝむ和漢相同じ狐の火を為ち說ハさゆゝあるとゝろ信ゝ我が目前ハ視
しハある夜深更の頃例の二階の窓の隙ハ火のうゝるを怪しゝその隙間より覗
きゝるバ狐雪の掘揚の上ハ在りて口より火をいでたゝくゝるバ呼息の燃るゝその
態口よりまたしし上ハゆゝるゆまゝハいゝる寒火のごとし一ハゆゝろけるバ赤ゝしく
のぞきゆゝりしゝ火をいでる時ありゝるゝ肚中の気ハ応ずるゆゝん
ゝるゝ気息常ハ火をゆるゝゝハ勿論之石亭ゝ雲根志ハ狐の玉のひるゆゝを云

しゞ狐火ハ玉のひるゆもあらぶ〜狐の玉とのゝ物の光ると常ハ云る狐火とも
別るゝ〜

○狐を捕る

友人曰我が親しき者隣村(夜話ハ往る飯るき途の傍ハ茶鐺ありしゞ頃
しも夏のゆゑ〜ゆゑ農業の人の置忘れてるゆゑん云るゆゑも腹悪きものハ拾
ひ隠さん持飯りて主を尋ねやと鐺を手ハさげて二町ばかりあるこ〜ハ志きりハ
重くゆり鐺の内ハ声ありて我をいづく〜連れ行ぞといふハ驚を消し鐺をもて
逃さり〜ハ狐前ハもり草の中(もり入り〜とゆり云ハるゆゑが一時の戯れゆる
ゞ〜ゆる妖魅の術ハありゆゞ〜人ハ欺れて捕(らるゝハ如何余答ていハ鉄炮を以
てもるハ論ゆ〜香餌を以てもるハゆゑ人の欺くを知れども慾を捨て慎むゆゑ
ハぞゆゑとハ知りゆゞ〜ゆゑを喰ひく友て人をあざむゆんとして捕(らるゝゆんゆ
ゆゑ邪智ゆゝきゆゑ豈狐のゝゆゞ〜ゆんや人も又是ハ似ゆる邪智あるものハ悪ま

とハ云りゆゞ〜かく為バ人ハ云るまゞ〜と己が邪智を〜ゆゝを終ハ身を亡ぼハいゆる淫
慾も貪慾も慾ハいづれも身を亡ぼの香餌ゝ至善人ハ路ハ千金を視室ハ美人と
對ゆれども心安ハ動ざるハ止るゝゝを知りて定るゆあるゆゑゝかゝる人ハ胸ハ明ゆる
鏡ありて善悪を照し〜視てゆきあゝきを知りて其獨を慎むゝを明徳の鏡ゆ
此鏡ハ天道さゆより誰ハも〜与へゆるれども磨ざれバ〜さゝれゝゝ若ゆり〜
時ある経学者の教ハ聞〜と狐の話ハつけ大学の蹄わりけて風諫せ〜ハ問ひ〜
人弱年ゆて云ゆも身ゆちのゝゞれゝゝ者ゆれバゆりきゝてハ无用の長舌ゆ
れどゆりひいづゆ〜ハまゆせく云ゆるせゆりさて我が里ハて狐を捕る術さゆゞ〜ある
ゆゆハ手を懐ハ〜て捕る術ありてゝの術いんとゆれバ春陽の頃ハつゆり〜雪も
昼の内ハ軟ゆるゆゑ夜ゆゞ〜狐の徘徊もる所(麥ゆど春杵を雪中ハさ〜入て二ツ
も三ツもきゝゆどけの穴を作りおけバ夜ハ入りて此穴も凍りて岩の穴のゆうハゆるゆり
さてゝれゝゝ好く油滚ゆどをちゝ〜いきゝの穴ハも入れゝくさて夜ゆけ人静りゝる

ころ狐こゝかきてうち〳〵かきてるを喰ひ尽し〳〵猶さゝぶるゝもの〳〵の穴ゐるを
くゝんと〳〵身をちゞめ倒ゐゐりて穴ゐ入りいまきてるものをくゝひつて出んとする
ゐ尾のもと〳〵いづる程ゐ作りまうけゐる穴ゐまゐ再びいづるゐ叶ふゐ雪ハ深夜ゐ
ちゞひてまも〳〵こゝりゐまゐちゐゐ穴をゆゐるゐもゐゐびんく〳〵として
終ゆハ性を労らも捕へんとまゐり〳〵ものゐまを又く水をくゝきてりてあるゐ入ゐ
あゐりゐる雪の穴ゐまゐゆゐハ水も漏ゐ狐ハ尾を振ハして水ゐふるゐむ入ハ辺りゐ
ありてゐまゐ将ゐ死せんとまゐる時ゐゐ〳〵ゐ尻をひるを避る狐尾を揺さゐるをゐて溺死に
るを知り尾を採り大根を拔ゐごとくして狐を得る穴ニツも三ツも作りゐくゆゐをり
よゐ時ハ二疋も三疋も狐を引拔るゐあり之ハ凍りて岩のゆうゐる雪の穴ゐまゐゐり
土の穴ハゐまゐ得りのゐまゐ自在をゐて逃さるゐ〳〵さまゐ雪国ゐふぎるゐゐまゐ
雪のつゐゐゐ

○鴈の代見立

我国雪盛なる時ハ鳥獣の食もぐきものの一点もなきゆゑ冬ハ山野の鳥を捕へ
春ゐいたり雪降りやゝ〳〵頃諸鳥をそゝる二月ゐいたりても野山一面の雪の中ゐ
清水ゐぐまハ水気温なるゆゑ雪のもと〳〵消る処もありて是水鳥の下る処と
雁ゐまをゐまゐまゐ三羽ちゐをりて己まゐ求食さて糞をのこして喰ある処の
目とゐ俚言ゐこまを雁の代見立とゐふ雁のかくもゐハ友鳥を集ひきたりて
かまゐゐも求食せんとて之朋友ゐ信あるゐ人も恥べきゐく〳〵ちるを心ゐき徒らの糞
をゐゐゐあり之代見立の糞あまゐゐるゐゐ種くの術を尽して雁のくるをまちて
捕ふ雁も〳〵〳〵とまゐてこまを見るゐゆ人ゐ見せゐ〳〵糞ゐ土をゐけてゐ〳〵
ゐく之代見立あ〳〵くさゐで食ゐりし処ふふんゐ土をゐけゐふゐびまゐ〳〵その
智ある人ゐゐゐ人まこまゐ〳〵ゐも知りてゐるさゐ糞ゐ土をゐけてゐるをゐまゐ
其辺りの矢頃よき処人の入るべき程ゐ椀をゐせてゐるゐうゐるものを雪ゐて作り後
ゐ入り口をつけ内ハ洞ゐゐ〳〵雁のをゐべき方ゐ穴をつくりてものきてゐるをまゐ雁ハ不時

中ハきてそくべき時あり事わいのべ　雁を又是バらの穴より鐵炮の銃口をいてそうこかくもるを里言ふ白きんぐうとゝふ雪ン堂ゝ是ゆもゝぎ雪ン堂ゝさぐの術あり雁の居る処を替るハ夕暮夜半曉ゝ人此時をまちて種くの工を尽して捕ふ我国雪の為ふさぐの難美ハあらず前ふらくるごとく多ゝ雪の重宝なるゆもあり第一ハ大小雪舟の便利編の製作○雪ン堂○田舍芝居の舞臺桟敷花道なる雪ゆて作る○辻賣の居る処賣物の臺架もなる雪ゆて作る是を里言ふさろやとゝふ○獣狩進鳥○積雪家を埋め却て寒威を禦ぐ○夏も山間の雪を以て奥島の肉を擁包おけば敗餒ぜ○雪水江河の源を養ふゆゑ此外詳ふいとぐ猶あるべし是をおもへバ天地の万物捨てきりのハあるべらゝ捨てきハ人悪のこ

○天の網

おゝゝ人悪をゆて天罰ふ漏ざるゆ奥の網ふゆゑざるごとく多ゆゑ是をたとへて天の網とゝふゆり新潟より三里上りて赤塚村とゝふあり山のところぐふ四を多くるあり古ふ此を以て細糸の網をもりて鳥をとる是を里言ふ赤塚の天の網とゝふ此村ふ沿ある多ゝ水鳥沿を慕ひくきゝり山の四を飛きゝりるゆゑらゞ天の網ふゝる大低ハ鵝とゝふ鴨ふ似る鳥ゝ美味なる多ゝ赤塚の冬至鳥ゝとて遠く称美も鵝鮮とゝふごきを省けるゆゑんあぢるゆゑハ古哥ふもあるよりあり

○雁の総立

おゝゝ陸島ハ夜中盲ゝとゝふり水鳥ハ夜中眼明ゝとゝふ雁ハ夜中物をゝるゆゑらゞ明ゝ他国ハゝらゝゞ我国の雁ハおゝくハ昼ハ眠り夜ハ飛行く眠る時ハ人ふ遠き処ふく集り眠る此時ハ首をあげて四方をゝるゆる雁二羽あり人ゝを番鳥とゝふ求食ふも先ゝ飛ふ列をゆゑハ雁行とゝ兵書ふもゝり人の居る処ゝ是ど居ふも位列をゆて漫ゆゝゞ求食時ハ衆あゝり遊ぶ時ハゝゆあそぶ雁中ふ一雁ありて所為衆ゝゆゑふ随ふ大将ゝ士卒とのごゝ一人のきるゝ又ハあゆゝを又是バらのぐん鳥羽ゝてきをゆて餘のゝとゝをきていゝふ求食とる移ぶゝとも此羽

さきをきゝあやまるゝ幾羽も亂て飛あがりて列をなして去る里言ふこれを雁の
総立といふ雁の備ある事軍陣の如し餘の島ふ多三ヶ之他国の雁も来ること
田舎人ふ珍しゝ称ど都會の人の話柄ふなり

○浩海川渉り

志ぶゝ川源ハ信越の境より出で越後の内三十四里を流れて千曲川ふ伴ひ此海ふ
入る此川越後の○頸城○奥沼○三嶋○吉志の四郡を流るゆゑ四府見の文字
ゆゑんなりといふ説ふ僻事ゝ古書ふ浩海又新浮海ともゝ云ふ此川屈り曲り
廣狹言ひ尽しがたゝ冬ハ一面ふ氷り閉てその上ふ雪つもりさる所平地のごとく
なれど急流岩ふ激して水勢絶急ゆゑハ雪もつもらるあらぬ浪を立る処もあり
渡口ゆゑハ斧ふて氷を碎きて渡せども終ふハ氷厚くなりてかゝるゆゑ船ハ陸
ふ在りて人ゝ氷の上を渡ることを里言ふ
物の凍るを○ざへ○ちる○いて ゆゑハ此川の氷り正月のもゝ二月のちゞ
めふいまゝハ陽気を得て自然と裂て流る大なるハ七八間種くの形をなす大小ひ
とつゝなれど川の廣き所と狹き処とふ且ふ裂ものゝ多くハ夕べふなるをなるか
ゆゑなれど一日あるひハ一昼夜をへだてゝ三十四里の氷をゆるがすゆゑ北海ふい
づるものひゞき千雷のごとく山も震ふだるゝ此日川ふちかゝる村ゝハ慎を居て外ふ
いづるなかれ他所の者ハ浩海川の氷見とて花見のやうふ酒肴をさゝげて山岸
ふ彩筵毛氈をしきてこれを見る大小幾万の氷片氷塊の盤石のごとき藍
のやうなる浪ふ漂ひながるゝハ目ざましき荘観なり氷を観て樂とする事ハ暖国ゆゑ
きゝふあるべからざる此川ふきたるべきこと奇談なり 次の巻ふ

北越雪譜初編巻之中 終